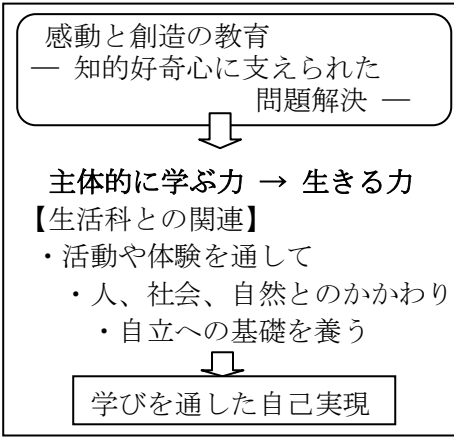


生活科 研究テーマ

「見つめる子ら」を育てるために であい ふれあい まなびあい

1 研究主題から



◎生活科の活動で大切にしたいこと

生活科は、具体的な活動や体験を通して、子どもが自ら学び、自ら生きる知恵を身に付けることをめざしている。知恵は、子どもが自ら活動し、関心をもち、気付き、考え、判断することによって身に付いていく。子どもが直観を働かせ、予測し、判断し、確かめ、納得して、思考のプロセスを学ぶことが大切である。

- ◆**であい**……身の回りの出来事について、知的好奇心をもって接する。
- ◆**ふれあい**……自らの興味・関心をふくらませ、自らの目・手・身体で感じ取る。
- ◆**まなびあい**……自らの体験・感覚を身の回りの人々と共有し合う。

2 こんな子どもに育ててほしい

- ◇ 思いや願いを持ち、活動する子
- ◇ 知的好奇心をもって、身の回りとかかわりあう子
- ◇ もう一度見直そうとする子
- ◇ ねばり強く解決に向けて取り組む子

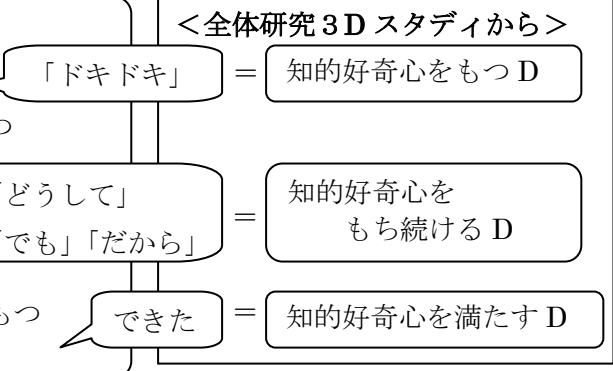


【生活科で不思議に思い
探求する子どもを育むキーワード】

み…みつめてごらん
ど…どうしてかな
い…いゆうはなあに
ま…まわりのみんなと
ち…ちゃれんじしよう

生活科で育てたい力

- 科学的な見方・考え方の基礎を培うために —
- ① 不思議に思ったこと、目標を見付ける
 - ② 「～すれば～なるかな」自分なりの見通しをもつ
 - ③ 自分なりに考えた方法を実行する
 - ④ 「～したら、～なったよ」結果を得る
 - ⑤ 「こうなったわけは、～」理由を考える
 - ⑥ 「もっと～したいな」新たな目標を見付ける
 - ⑦ 「こんどは～してみよう」自分なりの見通しをもつ
 - ⑧ 「～したら、もっと～なったよ」結果を得る



3 生活科で『知的好奇心』をどう捉えるか

— 「体験」を通して、
“よい目・よい耳・よい心”を育てていくこと —
身の回りのたくさんの自然・社会の事象に、積極的に出会い
自ら、興味・関心をもち対象と触れ合い
感じたこと・思ったことを先生や友達と確かめ合いながら

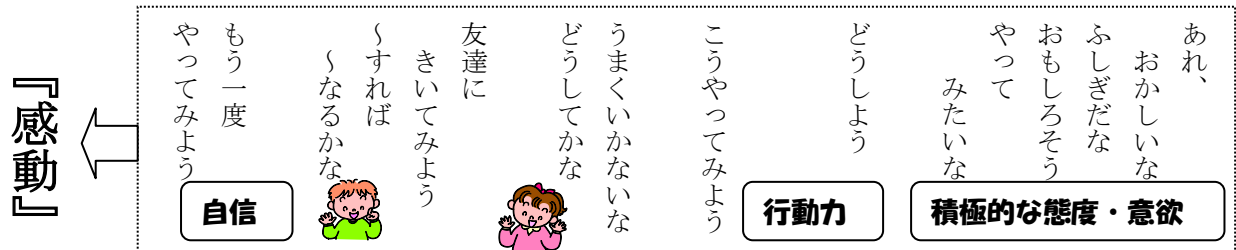
- ・対象にかかわるなかで、親しみを持つようになる。
- ・親しみを持つことから、それらの不思議さや仕組みに気付き、知的好奇心や探求心が育ち、もっとかかわりたいという願いを持つようになる。
- ・見る、思う、見直す活動を繰り返すことから、気付きに「広がり」や「深まり」を持つようになる。

学習は子どもの興味によって支えられるので、興味がなければ学習は成立しにくいと言える。だからこそ、生活科では、子どもの思いや願いを大切にする。子どもが不思議に思ったことや疑問を教師は受け止め、すぐに答えを出すのではなく、できるだけ生かすような助言をして、自ら追究させるようにすることが必要である。子ども自ら知的好奇心を持ち、自らの方法で追究できた喜びを感ずることが、知的好奇心を助長することになる。

4 生活科での視点の捉え方

【視点1 心を動かす支援の工夫】

生活科でねらう「自立への基礎」を養うために不可欠なのは、自分自身への自信とそれに裏付けられた意欲であると考えた。心を動かす支援を行えば、子どもたちの感動を呼び起こし、子どもたちの意欲を持続させていくことができる。出会いの感動が知的好奇心を生む。知的好奇心をもち続け、自分で考えたり、行ったりした方法で解決や実現ができたときの感動は子ども一人一人の自信へとつながり、さらなる意欲へとつながっていくだろう。そのための支援を以下のように考えた。



<具体的な手だて>

- 子どもの思いや願いを生かした、単元構成の工夫
- 多様な活動のための教材の工夫
- 子どもの思いを実現させるための地域人材の活用
- 子どもの心を揺さぶる事象との出会い

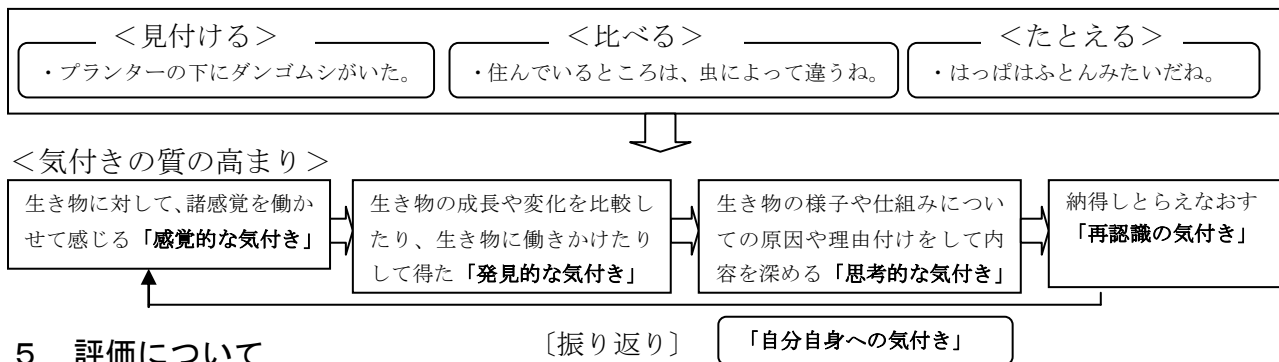


【視点2 思考力を育む指導の工夫】

気付きの質を高めることは、思考力や表現力の育成につながると考える。魅力的な学習材を提示し、子どもの知的好奇心を揺さぶり、意欲と知的な気付きを引き出し、価値付けてあげることが大切である。気付きを引き出し、広げ、深めて、気付きの質を高めるために、以下の例のような「見付ける」「比べる」「たとえる」活動を重視し、子どもの「見つめる目」を育てていく。

<具体的な手だて>

- 「見付ける・比べる・たとえる」などの多様な学習活動の工夫
- 諸感覚を使う体験の日常化
- 「見るー思うー見直す」の繰り返しの活動の工夫
- 教師の支援の工夫
- 実感を伴った気付きを、言葉で表現して価値付ける



5 評価について

生活科の評価は、結果よりも活動や体験そのもの、すなわち結果に至るまでの過程を重視し、子ども一人一人の伸びを見取り、評価していく。そのためには、子どもが様々な表現する思いや願いを共感的に捉え、一人一人の多様な学びや育ちを読み取るようにしたい。

- ☆子ども一人一人の伸びをどう見取るか
- ・わかったこと、感じたことを評価する。
 - ・積極的な活動への取り組みを評価する。
 - ・人とのかかわりを評価する。

方法

- ①行動観察による評価（観察記録）
- ②発言分析による評価（つぶやき・発言・会話）
- ③作品分析による評価（作品・発見カード）
- ④自己評価（振り返りカード）